View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Tsukuba Repository

私掠船と嵐 ： 1669年秋 リエージュの無名司祭の冒険

著者	藤井 陽子
雑誌名	筑波大学フランス語フランス文学論集
巻	32
ページ	45-60
発行年	2017-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2241/00149430

『筑波大学フランス語フランス文学論集』第 32 号、2017 年

私掠船と嵐
—1669 年秋　リエージュの無名司祭の冒険—

藤井　陽子

1. はじめに

17 世紀にはさまざまな聖地巡礼記が出版された。ジャン・ブーシェの『聖なる花束』[1]は 1614 年の初版以来、その後の聖地巡礼記の一種のモデルとしてシュリウス[2]などの聖地巡礼記に引用され、ベストセラーとなった。また、ジャック・グージョンの著作には美しい図版が多用され、多くの読者の想像力を刺激した[3]。

これらの聖地巡礼記の著者は、パレスティナでの活動を使命とし、聖地の維持管理及び巡礼者の保護に従事してきたフランシスコ会士である。彼らにとっては聖地での体験を語ることも重要な任務の一つであったと考えられ、その著作は検閲を受けたのち出版された[4]。

一方、古典主義時代における個人の旅行記は、個人的体験には出版するほどの価値はないとされ、ほとんど出版されることがなかった[5]。このため多くの個人巡礼記や旅行記がマニュスクリのまま残されることになった。本稿で紹介する無名のリエージュ人司祭のマニュスクリ[6]もこの範疇に属する。彼は 1668 年から 1669 年にかけて聖地を巡礼し、1693 年から 1694 年にかけてその巡礼記を書いた。自分の思い出や記憶を整理し楽しむため、そして、ごく親しい周囲の人々に読ませるために書かれたものだと思われる。

検閲を受けず、したがって出版された巡礼記にはありえない誤謬も散見するこのマニュスクリには[7]、逆に筆者の気の向くまま、自由に書かれた部分も多く見られる[8]。この自由な、ある意味本来の聖地巡礼記からは逸脱した部分にこそ、定型化された巡礼記には見られないおもしろさがある。

巡礼船が定期的に就航していた「大旅行」の時代、巡礼記は巡礼の記録であると同時にこれか

---

[1] Jean Boucher, *Bouquet sacré composé des plus belles fleurs de la Terre Sainte*, éd. Marie-Christine Gomez-Géraud, Champion, 2008.

[2] Bernardin Surius, *Le Pieux Pelerin, ou Voyage de Jerusalem*, Bruxelles, François Foppen, 1666.

[3] Jacques Goujon, *Histoire et voyage de la Terre-Sainte*, Lyon, Pierre Compagnon et Robert Taillandier, 1672.

[4] ブーシェは初版のため 1613 年に、再版のため 1620 年に出版許可を得ている（Boucher, *op. cit.*, p. 55 et pp. 546-547）。

[5] François Moureau, *La Plume et le plomb, Espaces de l'imprimé et du manuscrit au siècle des Lumières*, Paris, Presses de l'Université Paris-Sorbonne, 2006.

[6] *Voyage à Constantinople, en Égypte, en Terre-sainte, dans quelques îles de l'Archipel, etc.*, manuscrit conservé à la Bibliothèque municipale d'Amiens, cote Ms LESC 81 B. このマニュスクリは2008年4月にピカルディ—大学に提出受理された博士論文の研究テーマであり、より詳細な紹介は『筑波大学フランス語・フランス文学論集』、第 23 号、2008 年、27－49 ページに掲載されている。

[7] イエスが 40 日間断食し悪魔に誘惑されたとする山（マタイによる福音書 4 章 1－11 節）と、キリストの変容（マタイによる福音書 17 章 1－13 節）の舞台となったタボル山を混同している部分がある（Manuscrit, *op. cit.*, p. 312 *sqq.*）。

[8] アレクサンドリアの遊女の話（*Ibid.*, pp. 108-110）や、オスマン＝トルコ帝国の首都コンスタンティノープルや皇帝メフメト 4 世の逸話（『筑波大学フランス語・フランス文学論集』、第 29 号、31－47 ページで紹介）などが挙げられる。

ら巡礼に行こうとする人のための案内書の役割も果たしていた。未来の巡礼者に対する「注意」や「忠告」と題された章は、信仰の書に性格を変えた 17 世紀の巡礼記にはほぼ見られなくなっている。1601 年出版のバルルデ（Balourdet）[9]にはこのような章が存在しているが、わずか 13 年後のブーシェの巡礼記は、もはや巡礼を計画している人に持ち物や準備、旅行中の注意事項を事細かに説明したりしない。この頃になると、聖地巡礼を目的として旅に出るのではなく、ダルヴュー[10]のように商用旅行のついでに聖地まで足をのばす旅行者の方が多かったのではないかと思われる。

一方、本稿で紹介するマニュスクリには、伝統的ではあるが少々時代遅れな「聖地への旅をしようとしている人へのちょっとした忠告」[11]と題された章がある。筆者は古い時代の先例に忠実に、必要な持ち物や注意すべき食べ物、異なる宗教・風習・気候の土地を旅行する上での心構えや旅費に至るまで丁寧に説明しているが、そのなかに旅行中の危険を列挙した箇所がある。

> この旅行を海路からするか、陸路からするかは自由意志で決めればよい。この旅はかなり長く費用もかかるし、盗賊などの危険がある。アナトリアつまり小アジアでは必要な交通手段が見つからない場合もあるし、病気になっても誰も助けてくれない。あの野蛮人たちは、あなたを助けるどころか、あなたの持ち物を手に入れようと望み、あなたを死なせようとし、あなたの仲間たちをスパイであるという口実で奴隷にしようとしたり、必ず嫌がらせをするからだ。旅の仲間のうち一人が死んだときには、死者が持っていたものはすべて自分のものだといい、どんな言い訳も聞かずに彼らはそれらを自分のものにしてしまうからだ。そしてこのようなみじめな状態からあなたを解放するために、あなたに有利なように弁護してくれる者は誰もいないだろう[12]。

陸路でアナトリア半島を横断してシリアやレバノンからエルサレムを目指す場合は移動に時間がかかり、馬車や動物の賃料もかさむ。そして何より、行く先々で出会う人々が必ずしも信用できるわけではない。旅先で病気になったとしても親切に看病してくれるとは限らず、病人が死ねばその所有物を自分のものにできるという欲から、直接害を加えないにしても積極的に助けようとはしないというのだ。真偽のほどはともかく、見ず知らずの他人の好意を当てにするような甘さは持たない方がよいという忠告なのだろう。

では、海路を取った場合はどうなるのだろうか。移動するのに動物は不要だし、風に恵まれた

---

[9] Balourdet, *La Guide des chemins pour le Voyage de Hierusalem, et autres Villes & lieux de la Terre sainte*, Chalons, C. Guyot, 1601. Bibliothèque Nationale de France, microfiche, 8° O2f 783, pp. 15-20.　バルルデとブーシェの 2 つの巡礼記の性格の違いは、そのタイトルからも明らかであろう。

[10] Chevalier Laurent d'Arvieux, *Memoires du Chevalier d'Arvieux*, éd. Jean-Baptiste Labat, Paris, Delespine, 1735, 6 vol.

[11] *Manuscrit, op. cit.,* p. 55 *sqq.* : « Petit avertissement pour ceux qui prétendent de faire le voyage de la Terre Sainte ».

[12] *Ibid*., p. 58 : « Il est dans la libre volonté de faire ce voyage par mer ou par terre. Celui-ci est fort long, dispendieux et dangereux pour les voleurs. Et dans la Natolie [Anatolie] ou Asie Mineure, on ne trouve les commodités nécessaires, et en cas de maladie, aucun secours. Car ces barbares, au lieu de vous assister, ils tâchent de vous faire mourir sans [avec ?] l'espérance qu'ils auront ce qu'on a avec soi et de mettre vos compagnons dans l'esclavage sous prétexte que ce sont des espions et ne manqueront de trouver des avanies. Car quand un de la compagnie vient à mourir, il[s] disent que tout ce qu'on a lui appartenait, ainsi sans écouter aucune raison, ils s'en rendent les maîtres, et [vous] ne trouverez personne qui parlera en votre faveur pour vous délivrer de ces misères. »

場合には陸路とは比べものにならない速度で進むことができる。費用は乗船前に船長と交渉して決めればよい。乗組員とはうまく付き合う必要があるが、毎日違う人間に遭遇する陸路よりは危険が少ないようにも思える。しかし、「海からの旅も、危険と危難に欠けることはない。とりわけ私掠船もしくは海賊、あるいは別名海の泡と呼ばれる海賊のせいだからで、これらの海賊がキリスト教徒だろうと野蛮人だろうと危険なのだ」[13]と、リエージュの司祭は書く。

私掠船は国家や政府の許可証を携帯し、戦争中に敵国の商船を襲う船を指す言葉である。一方、海賊は誰の許可もなく、相手の国籍などに関わらず商船を襲っていたと考えられる[14]。運悪くこれらの私掠船や海賊に遭遇してしまった場合、旅行者が何の被害も受けないということはありえない、と司祭は述べる。

> 旅行者は常に何かを失うことになる。つまり、キリスト教徒の船に乗っていてトルコ人にとらえられたら、あなたはあっという間に奴隷にされてしまう。トルコ船か、スルタンの臣下であるギリシャ人の船に乗っていてキリスト教徒に捕らえられたら、最初の怒りをどうやっても許されることはない。父が息子に対して怒るようなもので、息子が父に対してではない。この最初の動きが過ぎてからなら、自分が外国人で巡礼だなどと説明できるだろう。この場合、艦長は何か返却するためにできるだけのことはしてくれるだろうが、すべてが元通りになることは絶対にない。それから、どこかの島に上陸させてくれるだろうが、そこから脱出するには自分でなんとかするしかない[15]。

私掠船や海賊に捕らわれた場合には、自分が乗っている船がどこの船かによって待遇が変わってくる。17 世紀の巡礼者たちは自分で商船を見つけ、船長と交渉して運賃を支払うという形で便乗させてもらうのが普通だった。直接パレスティナへ行く船はあまりなかったらしく、エジプトやコンスタンティノープルなどへ行く船に便乗し、到着した港で次の目的地へ向かう船を探すという、いささか計画性に欠ける旅をしていた。したがって、話がまとまって乗った船がトルコ人やギリシャ人の船だったことも珍しくなかったようである。

しかし、キリスト教徒の私掠船から見れば、オスマン＝トルコ帝国支配下のトルコ人やギリシャ人の船は攻撃対象になりうる。それでもこの場合は荷物を奪われたり怒られたりする程度で済むが、キリスト教徒の船に乗っていてトルコ人の海賊に襲われた場合、行きつく先は奴隷である。司祭が旅行中に出会ったなかにもトルコ海賊や軍に捕らえられて奴隷にされた人々がいた[16]。

---

[13] *Ibid.*, p. 55 : « Par mer, les dangers et les périls ne manquent pas, et entre autres à cause des corsaires ou pirates ou autrement écumeurs de mer, soient-ils chrétiens ou barbares ».

[14] 「私掠船」と「海賊」という 2 つの言葉がどれほど厳密に区別されて使われているかは不明だが、本稿では原文を尊重し訳し分ける。

[15] *Ibid.*, p. 55 : « On perd toujours quelque chose : que si on est dans quelque vaisseau chrétien et qu'on soit pris par des Turcs, vous voilà esclave. Si vous êtes dans un vaisseau turc ou des Grecs, sujets du grand Seigneur et que les chrétiens vous attrapent, il n'y a aucun pardon à la première furie, le père au fils ni le fils au père. Cet [Ce] premier mouvement étant passé, on peut remontrer qu'on est étranger et pèlerin, etc. En ce cas le commandant fera son possible pour faire restituer quelque chose, mais jamais le tout. Et puis on vous mettra à terre dans quelque île, d'où il faudra faire le possible pour en sortir. ».

[16] リエージュの司祭が出会った奴隷として売られたという経歴を持つ人物には、トレント出身でキオス島在住のフランソワ・ベルティ(マニュスクリ 36 ページ)や、コス島で司祭が奴隷の身分から解放するのに手助けをしたジョルジュ(同 76 ページ)、エジプトで窮地に陥った司祭を助けてくれた元マルタ騎士で改宗し

結局のところ、海陸どちらから旅をしようとも危険な目にあうことは覚悟のうえで旅を続けなければならないと司祭は述べている[17]。だが、その危機も巡礼地へ行く途中に遭遇すれば神に与えられた試練ともいえ、巡礼にとっても意味のある苦難であり、巡礼記のなかで詳細に語る意義もあるだろう。逆に、巡礼後の帰路に起こる事件は、あくまで個人的な事件であり、巡礼記の中ではそれほどの重要性は置かれないのが通常である。

本稿では、出版された巡礼記にはほぼ見られない帰路での事件に注目し、無名のリエージュ人司祭がパレスティナからキオス島へと戻る船旅の間に体験した冒険について紹介する。

2. リエージュの無名司祭の冒険

2.1. テル＝アヴィヴ＝ヤッファからシミ島到着まで　1669 年 7 月 23 日から 8 月 27 日

エルサレムおよびパレスティナの聖地巡礼を終えたリエージュの司祭一行は、ヤッファでキリスト教国へ戻る船を見つける。「ソンベキ」[18]と呼ばれるギリシャのシミ島の船で、船長や乗組員もシミ島出身者だった。一行は、運賃として 52 ピアストルを支払うこと、一行の関心を引くような場所には希望通りに寄港すること、同じ場所に 1 日以上滞在する場合は乗組員 1 人ずつに日当 2 ピアストルを追加で支払うこと、という条件で契約した。一行は 1669 年 7 月 23 日にヤッファを出港し[19]、サイダ、ベイルート、トリポリなどに立ち寄りながらパレスティナの海岸線を北上していく。そして 36 日間の旅の後、船長らの故郷シミ島に到着したところで事件が起きる[20]。

2.2. シミ島での事件

シミ島はアナトリア半島沿岸のエーゲ海に浮かぶ小さな島である。1373 年に聖ヨハネ騎士団に征服され、ドデカネス諸島の中でも商業の中心地として発展した。1522 年にオスマン＝トルコ帝国の支配下に入ったのちもこの島の商業中心地としての地位は変わらず、特産の海綿とその海綿を採るための船で有名だった[21]。このため、オスマン＝トルコ帝国内でも特権的な地位を占めており、大幅な自治権が認められていた。

リエージュの司祭はそのマニュスクリの中で、シミ島の地形と農作物について述べている。

> この島は周囲 40 マイルの島である。島にはギリシャ人が住むみすぼらしい町がひとつと、いくつかの村がある。他の民族はいない。ほとんどすべてが山地である。この島はキリスト教徒の私掠船にかなり悩まされ困らされている。私掠船は金や食料を得ようとしばしばこの島

たメフメト・アガ(同 101 ページ)などがいる。

[17] *Ibid*., p. 58: « Sur ce, il faut de la patience et de l'industrie [habileté], nonobstant tout ceci, il faut prendre courage, se recommander à Dieu et suivre la bonne intention qu[e vous] aurez pris ».　「このことについては、忍耐と巧みさが必要である。これらすべてにかかわらず勇気を持ち、神の御加護を求め、あなたが決心した良い意図に従わなければならない」。

[18] トルコ語では Sömbeki、シミ島のトルコ名がこの島特有の船の名称としても使われていた。リエージュの司祭のマニュスクリでは、« sembechi » または « sembequin » と書かれている。

[19] *Ibid*., pp. 375-376.

[20] *Ibid*., p. 413.

[21] Ioli Vingopoulou, *Le Monde grec vu par les voyageurs du XVI*^{e} *siècle*, Athènes, Institut de recherches néohelléniques, Fondation nationale de la recherche scientifique, « Collection Histoire des Idées », 2004, pp.157-158.

を訪れるが、パンは手に入らない。この島にはどんな種類の穀物も育たないからで、わずかな穀物はシミ人、つまりシミ島の住人たちがロードス島や近隣の島々に求めに行く。多くのブドウ園があり、イチジクがたくさんとれる[22]。

山がちで耕作には適さない小さな島だが、リエージュの司祭が訪れたとき、シミの町にはおよそ 2000 軒の家があったそうである。教会が２つと修道院が２つあり、夏の間住民たちはテラスで眠る。さらにこの島にはなぜか猫がいないという[23]。シミ島の名産品である海綿と船についての言及もある。「男たちは自分たちの船を使って貿易をしている。その船は前に言ったようにサンベキまたはサンベカンと呼ばれている。そして彼ら以外にこの類の船を扱えるものは誰もいない。彼らだけがトルコ皇帝から特権を得ている。そしてこの特権を享受するため、彼らはコンスタンティノープルへサンベカンで決められた量の海綿を運ばなければならない。これは税を支払うためで、ほかには何も払う必要がない」[24]。

シミ島の住民に対する司祭の評価は厳しく、「ギリシャ人の常で不愉快な人々」[25]だという。このあと表現はさらに厳しくなっていくのだが、カトリックの司祭がギリシャ正教徒に持つ偏見ないし悪感情が込められていることを考慮する必要があるだろう。この悪感情が一方的なものではなかったのか、あるいは他に理由があったのか、リエージュの司祭一行はこの小さな島に足止めされてしまう。

きっかけはリエージュの司祭の上司であるキオス島出身のマクリポダリ司教が、旅の疲れからか体調を崩したことだった。老齢の司教の健康回復のため一行はシミ島にしばらく滞在することになったが、この滞在は島民の態度により非常に不快なものになった。「あのごろつきどもは金を払うといってもわたしたちにパンを提供したがらなかったし、この島から出ていこうとしても船を提供したがらなかったのだ。せめて 60 マイル離れたコス島か、40 マイル離れたロードス島まででも行きたかったのに」[26]。

司祭がギリシャ人やギリシャ正教徒に対してあまり良いイメージを持っていないことは、この部分だけではなくマニュスクリ全体から見てとれる[27]。カトリックの司教一行は食料すら満足に

---

[22] *Manuscrit, op. cit.*, pp. 413-414 : « [nous arrivâmes à Symi] qui est une île de 40 milles de circuit. Elle a une méchante ville et quelques villages habités par des Grecs et pas d'autres. Ce sont presque toutes montagnes. Cette île est fort tourmentée et inquiétée par les corsaires chrétiens, lesquels les visitent souvent pour avoir de l'argent et des provisions, mais pas du pain parce qu'il n'y croît aucune sorte de grain et le peu que les Symiotes ou les habitants de Symi vont chercher à Rhodes ou ailleurs dans les îles voisines. Il y a beaucoup de vignobles et est abondante en figuiers ».

[23] *Ibid.*, p. 414.

[24] *Ibid.*, p. 414 : « Les hommes trafiquent [commercent] par mer avec leurs bâtiments, lesquels, comme j'ai dit, sont appelés sembechi ou sembequins. Et il n'y a personne d'autre qui puisse se servir de cette sorte de barques sinon eux, ayant seuls ce privilège du grand Turc. Et pour en jouir, ils sont obligés de porter à Constantinople dans le sembequin une certaine quantité d'éponges et ceci est pour satisfaire au tribut et rien d'autre ».

[25] *Ibid.*, p. 414 : « Méchantes gens comme d'ordinaire sont les Grecs ».

[26] *Ibid.*, p. 414 : « ces canailles ne nous voulaient donner du pain pour notre argent et ne nous voulaient donner aucune barque pour nous en aller, au moins jusqu'à Stanchio [Cos] qui en est éloignée 60 milles et 40 de Rhodes ». スタンシオは現コス島、シミ島の北西約 70 キロに位置し、ロードス島はシミ島の南東約 45 キロにある。

[27] 上司であるマクリポダリ司教に対する評価もそれほど好意的ではない。司教はギリシャ人らしく機知にあふれ、とても頭の良い人物だが、「とてつもなくケチだ」という(*Ibid.*, p. 3)。ただしマニュスクリの中にマクリポダリ司教の吝嗇さを示すようなエピソードは見られない。

売ってもらえず、島から出るのに必要な船も雇えなかった。生活必需品でさえ近隣の島に頼るような島なのだから行き先を選ばなければ脱出可能なはずだが、司祭一行の求めに応じて船に乗せてくれる島民はいなかったようである。

八方ふさがりの状況におかれた一行だったが、ここで思いがけない事件が勃発する。「わたしたちがそこで過ごしたみじめな滞在の間に、私掠船のジャン・ド・リヴォルヌ船長が 26 列の、つまり 52 人の乗組員がいる武装した小型ガレー船で、金と食料を求めてシミ島にやってきた。そのことを聞いて町民たちは「プロトゲロス」つまり町民の中で最も年老いた男を選び、その男がわたしたちのところに話しにやってきた。そしてこの船長が彼らをそっとしておくように住民たちのために仲介してほしいと願いでてきたのだ」[28]。

ジャン・ド・リヴォルヌという名からイタリアのリヴォルノ出身と考えられるこの船長は、シミ島に寄港して食料や金を要求してきた。52 人の漕ぎ手がいる私掠船に恐れをなした島民は突然リエージュの司祭たちのことを思い出したらしい。今まで自分たちが嫌がらせをしていたことは棚に上げて、船長と同じカトリック教徒の司祭たちに仲介の労を取ってほしいと頼みに来た。「わたしは喜んでこの役目を引き受けた。何も彼らの役に立とうとしたのではない。率直に言って彼らはそれに値しない。そうではなくて、わたしたちをこの地獄から解放する方法を何か見出そうとしたのだ」[29]。司祭は困っている島民を助けようなどというほどお人よしではなく、この状況を自分たちに有利になるように利用しようとする。

> そこでわたしは 2 人の仲間とともに私掠船の船長に会いに行った。彼はわたしたちが外国人だと知ると、とても礼儀正しく私たちを迎えた。わたしは彼にあまりにも長い間わたしたちは悲惨な状況に苦しんでいると伝えた。船を一隻手に入れるために懇願したり頼んだりしたにもかかわらず、この島から脱出することもできない、と。しかし、わたしは船長に、嫌がらせやその他の不運が怖いので、わたしたちが出発するまでは島民たちをそっとしておいてほしいとお願いした。船長は快諾した[30]。

幸いなことにジャン船長は司祭の話に耳を傾け、一行がこの島から脱出できるよう手を貸してくれることになった。といっても武力行使するのではなく平和的なやり方で解決しようと、シミ島の住人に対する要求を取り下げる代わりに、司祭一行のために船を準備して出発させるよう求めたのである。しかも司祭の方は船主と相談して合意した金額の報酬を支払うというのだから、それほど高圧的な要求とも考えにくい。ジャンは住民代表に新しい要求を伝え、住民の同意を得

---

[28] *Ibid*., p. 414 : « Pendant le misérable séjour que nous y fîmes, il y vint le capitaine Jean de Livourne, corsaire, avec sa galiote armée de 26 bancs, qui veut dire de 52 hommes pour demander de l'argent et provisions. Ce qu'entendant les habitants de la ville, ils députèrent le prothoyero ou le plus vieux des bourgeois pour nous venir parler et nous prier d'intercéder pour eux auprès de ce capitaine pour qu'il les laissât en repos ».

[29] *Ibid*., pp. 414-415 : « Ce que je fis très volontiers, pas pour leur rendre service, parce qu'en conscience ils ne le méritaient, mais pour tâcher à trouver quelque moyen de nous délivrer de cet enfer ».

[30] *Ibid*., p. 415 : « Je fus donc avec deux de mes camarades trouver le corsaire, lequel apprenant que nous étions étrangers nous reçut fort honnêtement. Je lui fis part de nos misères que nous souffrions depuis si longtemps sans en pouvoir sortir, nonobstant les instances et prières que nous faisions pour avoir une barque. Je le priai cependant de les laisser en repos jusqu'à ce que nous fussions partis, crainte de quelque avanie ou autre disgrâce, ce qu'il fit fort volontiers ».

ると島を去っていった[31]。

これでようやくこの敵意に満ちた島から脱出できるはずだったのだが、武装した私掠船という危機が目の前から消えたとたんに島民の態度が豹変する。

> その後、あの呪われた人々は約束を守る代わりにロードス島に行ってパシャに会い、わたしたちがキリスト教徒の私掠船のスパイの役目を務めるためだけにこの島にいるのだと告発してやるとわたしたちを脅してきた。(中略)これらのギリシャの犬たちが企てたことが成功したとしたら、パシャがわたしたち全員を奴隷にしてしまうとか、さらにはまた、何ら他の手続きもなくわたしたちを死なせるとか、もう少しましなら苦役、あるいは多額の身代金を払わされるような目にあうのはほぼ確実だった。旅券を引き合いに出して見せても無駄である。こんな場合に旅券が何かの役に立つことはほとんどない[32]。

島民にしてみれば新たな嫌がらせの種ができたようなものだったのだろう。ジャンと司祭が、島民たちが頼んだこと以外の話もしたことは事の成り行きを見れば明らかである。今度は、ドデカネス諸島を所管するロードス島のパシャに、一行が敵国の私掠船と結託していると訴えると言ってきた。こうなると先にジャンと会談したことが司祭たちの不利に働く。リエージュの司祭は出発地であるウィーンでオーストリア皇帝発行の旅券を、コンスタンティノープルでオスマン帝国の皇帝メフメト 4 世発行の旅券を入手していた[33]。ところが、広い帝国内ではこれらの公式書類が常に尊重されるとは限らない。危機を脱するのに必要なのは、相手によっては無価値になることもある書類よりは個々の旅行者の知恵もしくは運ということになる。この場合、司祭一行にはその両方が要求された。

> しかしながら、わたしはこの企まれた意地悪な行為を察した。わたしはこの話を司教に告げた。司教は歩いて修道士たちの 2 つの修道院へなんとか赴くと、修道院長たちに住民のやり方に対して苦情を申し立てた。事情をありのままに聞くと、修道院長たちは町の主な人々を呼び出して彼らを強く叱責した。それが本気だったのか見せかけだったのか、わたしには言えない。どっちもどっちだからだ。彼らとわたしたちの間で何度か儀礼的な行為が繰り返された。そのあとわたしたちは宿舎に戻ったが、とても不安だった。あの嫌な人々を全く信頼できなかったから[34]。

---

[31] *Ibid*., p. 415 : « Il fit appeler trois des principaux des habitants et leur dit qu'à notre égard, il ne leur ferait aucun tort ni violence, mais à condition qu'ils nous pourvoiraient d'une commodité pour partir en leur donnant ce dont on tomberait d'accord. Ces infâmes le promirent et sur ceci le corsaire partit ». 「彼は住民たちの代表 3 人を呼び出し、わたしたちに免じて住民たちに間違ったことも暴力も振るわないといい、だがそれは話し合って同意した金額を島民に支払うかわりに、島民たちが私たちに出発するための手段を準備することが条件だといった。あの卑しむべきやつらはそれを約束し、それを確認して海賊は出ていった」。

[32] *Ibid*., p. 415 : « Après quoi, ces gens maudites, au lieu de tenir leur promesse, nous menacèrent d'aller à Rhodes trouver le pacha, et nous accuser disant que nous étions seulement dans cette île pour servir d'espion aux corsaires chrétiens. […] si ceci aurait eu le succès que ces chiens grecs se promettaient, il est très certain que le pacha nous aurait tous fait esclaves, ou bien encore nous faire mourir sans autres formalités ou pour le moins la galère, ou bien se racheter avec une grosse somme d'argent. Et nous aurions eu beau d'alléguer et montrer nos passeports, en ce cas ils auraient très peu servi ».

[33] *Ibid*., p. 5 et p. 28.

[34] *Ibid*., pp. 415-416 : « Cependant j'eus quelque vent de cette méchanceté tramée ; je le dis à notre évêque, lequel fit ses efforts pour marcher et se transporter dans les deux monastères des religieux où il se plaignit aux supérieurs contre le procédé des habitants. Après avoir entendu la chose comme elle était, ils firent appeler les principaux de la ville et leur donnèrent de fortes réprimandes. Si c'était tout de bon ou pour feinte, je ne le puis dire car les uns ne vaillent non

面と向かってロードス島のパシャに告訴するといわれたのか、それとも島民の不穏な動きを察知したのか、リエージュの司祭は島民にはジャン船長との約束を守る気がないと感じた。彼はマクリポダリ司教にこのことを告げ、司教は島の修道院長に助けを求めた。

話を聞いた修道院長は町の責任者を呼び出し叱責するが、この頃にはリエージュの司祭もかなり人が悪くなっていたようで、修道院長が本気で怒っているのではなく立場上仕方なく叱責しているのではないかと疑ってしまう。修道院長はカトリックの司教一行が島に滞在していることさえ知らなかったのかもしれないし、島民が嫌がらせをしていることを知っていて放置していたのかもしれないが、真相はわからない。修道院長に諭された島民との間で仲直りの儀式のようなものが行われたが、事態が進展したわけでも解決策が提示されていたわけでもなかったため、司祭の不安は消えない。

> 結局 3 日後にわれらがジャン船長が、わたしたちが出発したかどうかを確かめるという口実で戻ってきた。わたしたちがまだシミ島にいることを知って船長は大いに怒り、わたしたちが去るために何らかの手段を与えないなら、町に火をつけてすべての人間を奴隷にしてやる、そして船長自身もわたしたちが出発しない限りここから出ていかない、と脅した。住民たちはようやくそうした。わたしたちは 15 ピアストルを支払い、コス島まで船を一隻手に入れることができた。しかしジャン船長は遠くから私たちの後をついてきて、あのごろつきどもがコス島に行く代わりにわたしたちをロードス島へ連れて行かないように見張っていてくれた。島民たちにはそんなことはたやすくできるのだ[35]。

ジャン船長が島を再訪したことで、事態はようやく動き出す。自分の前でなされた約束が何一つ守られていないことを知ったジャンは激怒し、再度島民を恫喝した。島民はしぶしぶではあったが船を用意してコス島まで連れて行ってくれることになった。一度約束を反故にされているので、ジャンも用心深くなっている。司祭一行を乗せた船が確実にコス島へ行くかどうか、まるで護衛船のように後方からついてきて見張ってくれた。

コス島はシミ島の北西、ロードス島は南東に位置しているので、少し注意していればどちらに進んでいるかは明白だろうが、たとえロードス島に向かったとしても船の乗組員はすべてシミ島人であり、司祭一行が異議をとなえたところで聞き入れられたかどうかは疑問である。一行にとって幸いなことに、ジャンの脅迫のおかげか、船は約束通りコス島へと向かった。「ついに、一晩と半日をかけてこの 60 マイルを進んだ後、わたしたちはコス島に着いた。あの呪われたギリシャのシミ人たちが町のカディの元へ行って、何かわたしたちに嫌がらせをしないように、一時も無

---

plus que les autres. Après quelques cérémonies faites entre eux et nous, nous nous retirâmes dans notre quartier, mais fort inquiets, ne nous fiant à ces misérables ».

[35] *Ibid*., p. 416 : « Enfin trois jours après, notre capitaine Jean corsaire revint sous prétexte de voir si nous étions partis. Sachant que nous étions encore là, il entra dans une colère très grande, il menaça de mettre le feu dans la ville et de faire toutes les gens esclaves s'ils ne nous donnaient quelque commodité pour nous en aller et qu'il ne partirait plus de là si nous n'étions partis. Ce qu'ils firent et nous eûmes une barque moyennant 15 piastres jusqu'à Stanchio. Mais le corsaire nous suivit toujours de loin pour voir si ces coquins ne nous mèneraient à Rhodes au lieu d'aller à Stanchio, ce qu'ils auraient pu facilement faire ».

駄にせず別の船を探した。」[36]

こうして、5 週間も足止めされたのち、司祭一行はようやくシミ島から脱出した。そして、シミ島の船の乗組員の嫌がらせを避けるため、すぐに次の船を見つけてコス島から出航したのである。

2.3. 嵐の中で

シミ島からようやく脱出した司祭一行は、コス島の対岸にあたるアナトリア半島へ渡り、翌日キオス島を目指して北上を開始する。しかしまた別の海の危険が彼らを待ち受けていた。「わたしたちは絶えず命を失うのではと思うほどの嵐に襲われた。櫂は壊れ、帆は破れ、舵以外のものは何も残らなかった。そして幸運なことにこのような小さな船に普通ついているものよりもこの舵が大きくなかったとしたら、確実に難破していた」[37]。

一行は船自体も破壊されかねないほどの嵐に襲われるが、この危機を乗りこえるためにすべての乗員が力の限りを尽くす。「一人ひとりが無理をして働くときだった。ある者は水を船の外にかい出し、ある者は櫂を付け替え、帆を縫いなおすために働いた。その間、真の痛悔の祈りを唱えつつ、みな神に祈り続けた。ついには皆が心からご加護を祈る神に対しそれぞれが守護聖人を求め、体と魂を救済するためにできる限りのことをした」[38]。

乗組員だけではなく乗客も一致団結して力を合わせるなかで、リエージュの司祭も自分にできることをやり始める。「わたしは、コンタリーニ氏とかいうヴェネツィア貴族のそばに座り、船尾で帆を操作し始めた。コンタリーニ氏は艦船で奴隷として数年を過ごし、1000 ピアストルの身代金を支払って自由を取り戻したのだった。コンタリーニ氏は船の操縦にはかなり熟練していたので、神の次にこのコンタリーニ氏がその素晴らしい手腕でわたしたちを救ってくれたといわねばならない」[39]。

コンタリーニ家は代々ドージェや大司教を輩出したヴェネツィアの大貴族の家柄である。リエージュの司祭と同時代に限っても、1659 年から 1675 年まで 104 代ドージェを務めたドメニコ・コンタリーニ[40]や、1676 年から 1684 年まで 106 代ドージェだったアルヴィーゼ (ルイジ)・コン

---

[36] *Ibid*., p. 416 : « A la fin, après avoir resté une nuit et un demi-jour pour faire ces 60 milles, nous arrivâmes à Stanchio où nous cherchâmes sans perdre aucun temps une autre commodité, crainte que ces maudits Symiotes grecs n'allassent trouver le cadi de la ville pour nous causer quelque avanie ».

[37] *Ibid*., p. 417 : « nous fûmes surpris d'une tempête telle que nous croyons à tout moment de périr. Nos rames furent brisés, nos voiles déchirés et il ne nous restait autre que le gouvernail et que si par un bonheur il n'eut été plus grand que pour l'ordinaire d'une petite barque semblable, le naufrage était certain ».

[38] *Ibid*., p. 417 : « C'était pour lors qu'un chacun se forçait à travailler, l'un pour jeter l'eau hors de la barque, l'autre pour remettre les rames et recoudre les voiles. Et cependant on ne laissait de se recommander à Dieu en faisant des actes d'une vraie contrition. Chacun enfin cherchait des saints patrons auprès de Dieu qu'on invoquait d'un grand cœur et on faisait son mieux pour sauver le corps et l'âme ».

[39] *Ibid*., p. 417 : « Je m'étais mis à travailler aux voiles sur la poupe, étant assis auprès d'un certain Monsieur Contarini noble vénitien, lequel après plusieurs années d'esclavages sur des vaisseaux s'était racheté pour mille piastres. Et comme il avait une pratique fort grande pour gouverner des vaisseaux, il faut dire qu'après Dieu il nous sauva par sa grande dextérité ».

[40] ドメネコ・コンタリーニは 1585 年、ジュリオ・コンタリーニの次男として誕生し、パドヴァ大学で学ぶ。1669 年 9 月、クレタ島をトルコに奪われる。

タリーニ[41]の名が挙げられる。司祭が出会ったコンタリーニ氏も同じ一族の人間だったのだろう。この人物の名はここで突然出てくることから、コス島で雇った船の乗組員であったと考えられる。コンタリーニ氏はヴェネツィア貴族の名に恥じぬ活躍を見せ、櫂は壊れ帆も裂けてしまった小さな船を巧みに操って、なんとか嵐をやり過ごそうとする。

> 波を数えていた。9 番目にくる波が常に最も危険だった。わたしたちはいわば波のまにまに埋葬されたようになったり、山の上まで持ち上げられたようになったりした。結局のところ、わたしにはこの嵐を描写することができないくらい、怒り狂った恐ろしい嵐だったのだ。そしてわたしたちを危うく破滅させそうになったこと、それは一匹の大きな魚で、わたしたちの方にまっすぐやってきて泳ぎながらぞっとするような波を投げつけたのだ。コンタリーニ氏はわたしに、嵐よりもあの魚の方が怖かったといった。しかし嵐と同様に、私たちは怖くなっただけで済んだ。なぜならその魚はわたしたちよりも低いところを通り過ぎて行ったからだ[42]。

荒れ狂う嵐の中で一行は巨大な魚と遭遇する。人を飲み込むほどの巨大な魚といえばすぐに聖書のヨナ書の話が思い浮かぶ。紀元前 8 世紀の預言者ヨナは、主にニネベの町に行きその滅亡を告げよと命じられたが、主の命に背いて船で逃亡しようとする。しかし、ヨナの乗った船は大嵐に襲われ、ヨナは嵐をおさめるために海に投げ込まれた。主は魚に命じてヨナを飲み込ませ、ヨナは魚の体内で 3 日 3 晩をすごしたのち陸地に吐き出される[43]。

このヨナの話は新約聖書の中でも言及されている。マタイによる福音書 12 章でイエスは、「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがるが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる」[44]と、自らの受難と復活を予告している。

幸いなことに司祭一行はヨナのように大魚に飲みこまれることもなく、魚が起こした大波に転覆させられもしなかった。やがて嵐は過ぎ去り太陽が顔を出す。「わたしたちは大陸の片隅に上陸し、そこで服を太陽にあてて乾かす間、できる限り破れてしまったものを縫い合わせた。それから再び海に出たが遠くには行けなかった。逆風のため、海の中の岩礁の風があまり強く吹かない方に身を隠さなければならなかったのだ。わたしたちはそこに 3 日間いたが、その間パンも真水も足りなくなった」[45]。

---

[41] アルヴィーゼ・コンタリーニ（1601 年－1684 年）。フランスなどで外交官のキャリアを積んだのち、1676 年にドージェに選出される。

[42] *Ibid.*, pp. 417-418 : « On comptait les ondes et la neuvième, toujours la plus dangereuse ; tantôt nous nous trouvions pour dire ainsi ensevelis entre les ondes et tantôt relevé comme sur des montagnes. Enfin je ne saurais d'écrire cette tempête, tant elle était furieuse et horrible. Et ce qui acheva presque de nous perdre, ce fut un certain gros poisson qui venait droit à nous et qui jette des ondes épouvantables en nageant. Et le Sieur Contarini me dit qu'il craignait plus ce poisson qu'une tempête. Mais nous en fûmes quittes pour la peur aussi bien que de la tempête, car ce poisson passa plus bas que nous ».

[43] ヨナ書第 2 章。

[44] マタイによる福音書 12 章 39－40 節（新共同訳）。

[45] *Ibid.*, p. 418 : « Nous prîmes terre dans un coin de terre ferme où nous mîmes nos habits au soleil pour sécher, et cependant on raccommoda ce qui était délabré au mieux qu'il fut possible. Puis nous reprîmes la mer, mais nous n'allâmes pas loin en tant que le vent contraire nous obligea de nous retirer sous un écueil dans la mer du côté où le vent ne soufflait si fort. Nous y restâmes trois jours, pendant lesquels le pain et l'eau douce nous manquèrent ».

逆風をやり過ごすために岩礁に隠れたまではよかったが、風は一向に止まず、船は岩礁から出られなくなってしまった。コス島からキオス島までは普通なら 2, 3 日で到着できる距離だが、嵐と逆風により司祭一行はその約 6 倍の 17 日間もかかってしまったため[46]、出発前に準備していた備蓄食料や飲料水が足りなくなった。しかも司祭たちが避難していたのは大陸でも人が住む島でもなく、単なる岩礁である。「食料や飲み物が欲しいときには岩に隠れたカタツムリを探さなければならなかった。また、塩が底に残るように海水を沸かすため、薪や木の根を探すために岩に上らなければならなかった。何度も繰り返し沸騰させたのだが、水はずっと塩辛すぎた。だが、どうしろというのだ。歯に逆らってもそこを通さねばならなかった」[47]。

海水を沸騰させても普通に飲めるほど塩分がとり除けるわけではないが、我慢して飲まねばならなかった。食料を探したところで、岩礁の上に生息する生物はそれほど多くないだろうから、カタツムリを見つけることができただけでも幸運だったかもしれない。

こうして司祭一行は嵐と難破、さらには餓死寸前の危機に遭遇する。だが、幸運に恵まれていたのか、司祭が常に感謝をささげる神の御加護のおかげなのか、一行はなんとかこの危機も脱したのだった。

2.4. トルコの村での冒険

岩礁に避難して 3 日目、ようやく逆風がおさまり、リエージュの司祭一行は岩礁から出発するところができた。「3 日目の夜ごろ風がおさまり、わたしたちはアナトリアに上陸して船から出た。わたしたちはすぐに海の一番近くにある淡水を求めて穴を掘り始めた」[48]。飲料水を確保し、次に食料を入手しようとした一行は夜が明けると 2 人の従僕に近隣の村を探しに行かせた。「彼らは 5 時間歩いて、トルコ人が住む村を見つけた。彼らはまずキリスト教の私掠船のスパイだと思われた。それはわたしたちにとって更なる不幸だった。こうして村人たちは、違うという抗議にもかかわらず彼らを奴隷にした」[49]。

突然現れた 2 人の見知らぬ男たちを見て村人は不審に思い、キリスト教国の私掠船のスパイと

---

[46] *Ibid.*, p. 418 : « Il est vrai que nous avions fait nos provisions pour huit à dix jours, quoi pourtant que de Stanchio à Chios il n'y ait que 200 milles, comme j'ai dit ailleurs, et qui se peuvent faire en peu de temps, savoir deux nuits et un jour ou chose semblable, et encore moins pour que le vent ne soit contraire. Cependant par malheur, nous en mîmes ou employâmes dix-sept jours et autant de nuits ». 「8 日から 10 日分の備蓄は確かにしていた。他のところで述べたように、コスとキオスは 200 マイルしか離れていないとはいえ、さして時間もかからない。2 夜と 1 日かそのくらいのものだ。風が逆風でなかったらもっと早く着く。しかしながら不幸なことに、わたしたちは 17 日と 17 夜かかってしまった」。司祭は正確な日付を残していないが、シミ島出発が 10 月 1 日とすると、翌 2 日にコス島に到着、キオス島には 10 月 18 日に到着したものと思われる。

[47] *Ibid.*, pp. 418-419 : « si nous voulions manger et boire, il nous fallait chercher les limaçons qu'on trouvait cachés aux rochers, y monter pour chercher quelque bois ou racines pour faire bouillir l'eau de la mer afin que le sel resterait [reste] au fond. Et ceci par plusieurs reprises et encore l'eau était assez ains [mais] trop salée, mais quoi faire ? Il fallait passer par là malgré nos dents ».

[48] *Ibid.*, p. 419 : « Le 3e jour, il devint calme vers la nuit, si que nous allâmes prendre terre dans la Natolie où nous sortîmes de la barque. Nous travaillâmes aussitôt à faire des fosses pour trouver de l'eau douce qui se trouve pour le plus proche de la mer ».

[49] *Ibid.*, p. 419 : « Ils marchèrent cinq heures pour trouver un village habité par les Turcs, qui les prirent d'abord pour des espions corsaires chrétiens, ce qui nous fut un surcroît de malheur. Et ainsi ils les firent esclaves malgré les protestations du contraire ».

して捕えてしまう。それから、一人の村人が司祭一行のもとにわざわざこのことを知らせにくる。リエージュの司祭は従僕を救うためにコンタリーニ氏とともに村へと向かった。勇気があるのか、職業意識の表れかそれとも冒険心からなのか。司祭は非常に行動力のある人間である。

司祭とコンタリーニ氏が村に到着したのはかなり遅い時間だったが、すぐにカディに会いに行き従僕の釈放を要求する。

> わたしたちはかなり遅くに村に着いた。にもかかわらずカディのところへ行き、わたしたちに与えられた損害と仲間に対して用いられた暴力について苦情を申し立てた（というのもこのような場合、従僕や下男、召使いなどといった肩書で話してはならないからだ）。その判事は金を得ようとして自分の意見を強くしっかり主張した。わたしたちは判事にスルタンの旅券を見せたが、この間抜けは旅券がわからないふりをした。誰か別の人間からもらったとか、わたしたちが偽名を使っているなどと言って。結局、事をおさめてわたしたちの従僕を解放させるにはヴェネツィアの 5 ゼッキーニ金貨を判事に与えなければならなかった。金を払ったとはいえ、それもかなり大変だった。というのもある点では、ポルトつまりオスマン宮廷から離れているこれらの尊大なトルコ人たちは旅券など馬鹿にしているのだ[50]。

捕えられた 2 人が従僕であることを隠したのは、大事な仲間の扱いでないと相手にされない可能性があったからだろう。彼らは食料を買いに来ただけでスパイなどではないと主張し、身分を証明するために旅券を提示した。しかし、この村のカディは旅券を見ても態度を変えない。カディには書類の真偽を確かめる手段がなかったのかもしれないが、単にお金目当てで言いがかりをつけただけと考える方が自然なようである。この事件はリエージュの司祭が繰り返す「旅券は役に立たない」という主張を裏付けるエピソードになった。それでもお金と引き換えに従僕たちは釈放され、カディから食料を買う許可も得ることができた。一件落着と安心したところにまた別の問題が起こる。「船に戻るために出発しようとしたところへ、カディ自身の召使から、武装したトルコ人たちが村から出たが彼らがどの道を取ったかは分からないと告げられた」[51]。

司祭一行はこの知らせをどう受け止めたものか迷う。本当に武装した村人たちが村から出て行ったのか、それともカディの召使が嘘をついているのか。本当だった場合、司祭一行を帰り道で襲うために村を出たのか、もしくは全く別の理由があるのか。司祭たちには判断がつかなかったが、コンタリーニ氏は最悪の場合を想定して対応する。

> コンタリーニ氏はカディに会いに行き、わたしたちをより安全に導くために何人か護衛をくださいとお願いした。判事はこの話に驚いて、自分の召使が彼に言うまでコンタリーニ

[50] *Ibid*., p. 419 : « Nous y arrivâmes assez tard, nonobstant nous allâmes chez le cadi pour nous plaindre du tort qu'on nous faisait et des violences qu'on usait envers nos camarades (car dans des cas pareils, il ne faut parler du nom de serviteur, valet ou domestique). Ce juge soutint fort et ferme sa partie pour avoir de l'argent ; nous lui fîmes voir le passeport du grand Seigneur auquel cette bête faisait semblant de ne le connaître, disant que nous le pouvions avoir eu de quelque autre et que nous nous servions des noms falsifiés. Enfin pour en être quitte, il fallait lui donner cinq sequins d'or de Venise pour délivrer nos hommes et encore avec difficulté assez grande, car ces insolents turcs qui sont en quelque façon éloignés de la Porte ou de la cour ottomane, ils se moquent des passeports ».

[51] *Ibid*., p. 420 : « Et comme nous voulions partir pour retourner à la barque, nous fûmes avertis par un domestique du cadi même que quelques Turcs armés étaient sortis du village, mais qu'il ne savait quel chemin ils avaient pris ».

氏の話を信じようとしなかった。カディは、おそらく自分の意地悪さとか意地悪な行為を隠すために、それは盗賊などではなく何か用事があって別の場所に行く人々だろうと答えた。しかしながらカディは 9 人の武装した護衛をわたしたちに与えた。それぞれに 3 ティマン[52]、つまり 5 ソル硬貨を払うことになった。わたしたちに警告してくれたカディの召使には半ピアストルを払った[53]。

カディはコンタリーニの話を信じなかったが、自分の召使に事情を説明されると武装した村人たちが村を出たという知らせが事実と思われることは認めた。司祭一行に危害を加えるためだというコンタリーニ氏の意見には賛成しなかったものの、カディは報酬と引き換えに護衛を出してくれる。司祭一行には結構な出費になったが、帰路に襲われては従僕を救出するために危険を冒した意味がなくなってしまう。

翌日、夜が明けてから司祭一行は何事もなくカディの護衛とともに船に戻る。カディの召使の情報は嘘だったのか、あるいは一行を襲うつもりだったが護衛がいたので断念したのかはわからない。「翌日、わたしたちは誰にも会わずに道を戻った。このことはわたしたちになされたのが、単なる嫌がらせだったのだと思わせた。司教と仲間たちはわたしたちを見て喜んだ。彼らはわたしたちよりも大きな苦しみの中にいたのである。わたしたちが奴隷にされたのではないかと恐れていたのだ。理由がないわけではなく、恐れるべき理由があった。しかし神は、かなり危険であったとはいえ今回もわたしたちを救ってくださったのだった」[54]。

無事に帰ってきた一行を見て、一晩中心配していた司教以下の仲間たちも大喜びする。加えて、水や食料も補給できた。これ以上このような土地にとどまる理由もなく、一行はすぐに出航する。

司祭一行の最終目的地はキオス島東岸に位置しているキオス市だったが、そこまで海路を行くには天候が心配だったらしい。シミ島出発から波乱に満ちた航海が続いていたので杞憂とも言えないであろう。彼らはキオス島の最南端に目的地を変更したが[55]、またも逆風に悩まされる。

---

[52] ティマン：キオス島の貨幣で 5 ソルに相当。(*Dictionnaire universel françois et latin, vulgairement appellé Dictionnaire de Trévoux*, Nancy, Pierre Antoine, 1740, art : « timin »).

[53] *Ibid*., p. 420 : « Le Sieur Contarini alla retrouver le cadi et le prier de nous donner quelques hommes pour nous conduire en plus grande assurance. Ce qui étonna le juge, ne le voulant croire jusqu'à ce que son serviteur lui eût dit. Le cadi répondit (peut-être pour couvrir sa méchanceté ou un méchant coup qu'il avait envie de nous faire) que ce n'étaient des larrons, mais bien des gens qui allaient dans d'autres lieux pour leurs affaires. Cependant, nous ne voulûmes partir sans gardes, ainsi il nous donna neuf hommes armés moyennant trois timins ou pièces de cinq sols à un chacun et une demi-piastre au serviteur du cadi, lequel nous avait averti ».

[54] *Ibid*., p. 420 : « Le jour suivant, nous reprîmes notre chemin sans rencontrer aucune personne, ce que nous fit croire que ce n'était qu'une avanie qu'on nous avait faite. L'évêque et autres compagnons se réjouirent de nous revoir car ils étaient dans des peines plus grandes que nous, crainte que nous ne fussions pris esclaves et avec raison, il y avait de quoi craindre. Mais Dieu nous conserva encore cette fois quoique fort dangereuse ».

[55] *Ibid*., pp. 420-421 : « Etant arrivés avec notre petite provision, nous nous rembarquâmes, nous avions encore 60 milles à faire jusqu'à la pointe de l'île de Chios et puis 40 autres jusqu'à la ville. Notre chemin fut assez favorable le reste du jour et une grande partie de la nuit, mais le jour après au matin, prévoyant de nouveau le vent contraire, on fut d'opinion de faire [on fut d'avis de faire, il fallait faire] tout le possible pour gagner la pointe susdite pour éviter quelque autre disgrâce, tellement qu'on dirigea la proue vers ledit lieu ». 「わずかな食料を持って到着すると、わたしたちは再び出港した。キオス島の先端までまだ 60 マイルあった。町まではさらに 40 マイルあった。わたしたちの道中はその日の残りと夜の大部分はかなり好都合だったが、翌日の朝、また逆風になることを予見したので何か他の悪いことを避けるために前述のキオス島の先端に着くためにできるだけのことをしようということになった。そこで船首をその場所の方向へ向けた」。

風があまりに荒れ狂い激しくなり、危うく船を転覆させてわたしたちを溺れさせるところだった。しかしながらこの風を突破しなければならなかった。でなければ島の先端に到着できなかっただろうし、海のただなかに投げ出され、わたしたちにとってもはや神の慈悲はなく、全員間違いなく死んでいたことだろう。神が守ってくださるようにお祈りやお願いをした。神はその神聖な寛大さにより守ってくださった。そしてわたしたちは島の先端に上陸し、持っていた荷物を陸に揚げて船長に支払った。船長は天に守られて行ってしまった[56]。

最後の航海でも難破しそうになったが、司祭一行はようやくキオス島の最南端に到着した。彼らにはこれ以上危険な船旅を続けるつもりはなく下船することにしたが、船長はそのまま船でキオス市に向かい、なにか商品を仕入れてコス島まで戻ればいくらか費用の足しになる収入が得られるはずだと言って再び出航した[57]。リエージュの司祭は命の恩人ともいうべきコンタリーニ氏ともここで別れたようである。しかし、この後陸路でキオス市に向かった司祭は、この船長に再会することも船長の噂話を聞くこともなかった。

3. おわりに

キオス島はマクリポダリ司教の故郷であり、リエージュの司祭一行が前年の冬を過ごした場所でもある。一行が無事に聖地巡礼の旅から帰ってきたというニュースはたちまち島中を駆け巡ったらしく、彼らは上陸地の近くに滞在していた聖職者の家に招待される。「わたしたちは大した儀礼もなく招待を受けた。17 日間のあまりにつらく危険な旅の後には休息が必要だと考えたのだ」[58]。この聖職者の家に滞在していた 3 日間に、ニュースを聞きつけた親せきや友人たちが大挙して押し寄せてくる。無事の帰還を喜びあった一行はその後キオス市内に戻り、マクリポダリ司教は自宅へ、リエージュの司祭は前回の滞在で友人になったフランソワ・ベルティ宅に滞在することになった[59]。こうして、司祭一行は無事に目的地に到着したのである。

聖地巡礼は短くても数か月、長ければ一年以上に及ぶこともある大旅行である。しかも巡礼たちにとっては敵国ともいえるオスマン＝トルコ帝国内を旅することになる。気候や環境も違えば、

---

[56] *Ibid*., p. 421 : « le vent devint si furieux et véhément qu'il manqua fort peu de nous renverser et nous noyer. Cependant il fallait forcer ce vent, autrement nous n'aurions pu arriver à la pointe et nous allions jeter en pleine mer où il n'y avait plus de miséricorde pour nous, nous aurions été infailliblement tous perdus. On fit des prières et des vœux à Dieu pour qu'il nous gardât, ce qu'il fit par sa divine clémence. Et nous gagnâmes la pointe où nous déchargeâmes les hardes que nous avions et nous payâmes le maître de la barque qui s'en alla à la garde du ciel ».

[57] *Ibid*., p. 421 : « Il nous dit de passer plus outre jusqu'à la ville de Chios pour voir de charger quelque marchandise [pour voir s'il y a quelque marchandise à charger] pour conduire à Stanchio et gagner quelque chose pour les dépens. Mais du depuis [depuis, dès lors], nous n'en avions plus entendu parler, ne sachant s'ils avaient changé de dessein et retournés à Stanchio sans aller à Chios ou s'ils ont été engloutis des ondes ». 「彼はわたしたちにキオスの町までさらに足を延ばして、何か積める商品がないか探してみるといった。コスまでその商品を持って行って費用の代わりにいくらか稼ごうというつもりだったのだ。だが、その後、わたしたちはこの船長の話を聞くことはなかった。彼らが予定を変えたのか、キオスに行かずにコスへ戻ったのか、はたまた波に呑みこまれてしまったのかはわからないままだ」。

[58] *Ibid*., p. 421 : « Ce que nous acceptâmes sans beaucoup de cérémonies, vu que nous avions bon besoin de repos après dix-sept jours de voyage si pénible et dangereux ». この聖職者はフィラデルフィア大司教でキオス司教の協働司祭でもあったレオナール・バッレリーニ (Léonard Ballerini) である。

[59] *Ibid*., p. 422.

イスラム教徒やギリシャ正教徒といった、宗教が異なる人々との摩擦も考えなければならない。

リエージュの司祭一行は 8 月 27 日にシミ島に到着し、10 月 22 日にキオス市に到着するまでの 2 か月弱の間にさまざまな事件に遭遇した。シミ島では住民に嫌がらせをされ、5 週間も足止めされてしまった。私掠船の船長はまるでヒーローのように現れ、一行をこの「地獄」から救出してくれる。1645 年に始まったクレタ戦争は、1669 年 9 月 26 日のヴェネツィア人の島からの退去により終結した。つまり、私掠船の船長ジャン・ド・リヴォルヌがシミ島の住民に水や食料を要求したとき、オスマン＝トルコ帝国とヴェネツィア共和国間の戦争は終わりかけていたことになる。このことはリエージュの司祭一行の運命に何か影響を及ぼしただろうか。

一刻も早くシミ島住民の手が届かないところに逃げたいという切実な思いから、一行は順風を待つような余裕もなく、嵐や逆風といった悪条件にもかかわらず出航した。その結果、危うく難破しそうになったり食料や水が不足したりして命の危険にもさらされる。ようやく発見した村では私掠船のスパイだとみなされてトラブルに巻き込まれる。一行がたどり着いた村がどこにあるのかマニュスクリの記述からは不明だが、普段キリスト教徒の商人や旅行者が頻繁に立ち寄るような場所ではなかったのだろう。旅行者はまさに異邦人であり、村人たちには警戒すべき闖入者であったと思われる。

このような危機を乗り越えることができたのは幸運に恵まれからだと当事者が考えるのはごく自然なことである。荒れ狂う嵐や強風の前で人間ができることは限られている。また、ギリシャ人やトルコ人といった考え方や宗教が異なる住民の敵意や悪意の前で事態を打開するための方策を考えつかないこともあるだろう。リエージュの司祭は嵐のなか懸命に帆を操りながら神に祈り続ける。嵐を乗り切ったとき彼が感謝するのは神に対してであり、その次に素晴らしい手腕で一行を難破の危機から救ったコンタリーニ氏に対してである。村人たちに捕らえられた従僕を救出したのは司祭とコンタリーニ氏だが、それも神が守ってくれたからだと司祭は感謝を捧げることを忘れない。有能ではあっても有限の人間の能力と、それとは比較にならない人智を超えた神の無限の偉大さを強調しようとするリエージュの司祭の意図が読みとれる。

参考文献

17 世紀の資料

本稿中の引用はすべて現代フランス語に直した。ただし書名や一部の固有名詞については原文を尊重している。

Voyage à Constantinople, en Égypte, en Terre-sainte, dans quelques îles de l'Archipel, etc., manuscrit conservé à la Bibliothèque municipale d'Amiens, cote Ms LESC 81 B.

Laurent d'Arvieux, *Memoires du Chevalier d'Arvieux*, éd. Jean-Baptiste Labat, Paris, Delespine, 1735, 6 vol.

Loys Balourdet, *La Guide des chemins pour le Voyage de Hierusalem, et autres Villes & lieux de la Terre saincte*,

Chalons, C. Guyot, 1601. Bibliothèque Nationale de France, microfiche, 8° O2f 783.

Jean Boucher, *Bouquet sacré composé des plus belles fleurs de la Terre Sainte*, éd. Marie-Christine Gomez-Géraud, Champion, 2008.

Jacques Goujon, *Histoire et voyage de la Terre-Sainte*, Lyon, Pierre Compagnon et Robert Taillandier, 1672.

Bernardin Surius, *Le Pieux Pelerin, ou Voyage de Jerusalem*, Bruxelles, François Foppen, 1666.

聖書

La Bible de Jérusalem, tr. Ecole biblique de Jérusalem, Paris, Desclée de Brouwer, 2000.

邦訳：『聖書』、新共同訳、旧約聖書続編つき、日本聖書協会、2007 年。

辞書

Dictionnaire universel françois et latin, vulgairement appellé Dictionnaire de Trévoux, Nancy, Pierre Antoine, 1740.

http://www.cnrtl.fr/dictionnaires/anciens/trevoux/index.php

論文・著作

Louis Baudoin, « Corsaires seynois et autres de Provence : la guerre de course au XVIIe siècle », in *Bulletin de la Société des amis du Vieux Toulon*, n° 84, 1963, pp. 96-112.

Salvatore Bono, *Les Corsaires en Méditerranée*, Paris, éditions Paris-Méditerranée, 1998.

Michel Fontenay, « L'esclavage galérien dans la Méditerranée des temps modernes », in *Figures de l'esclave au Moyen Age et dans le monde moderne*, Paris, l'Harmattan, 1996, pp. 115-143.

Histoire de l'Empire ottoman, sous la direction de Robert Mantran, Fayard, 1989.

Frédéric Hitzel, *L'Empire ottoman*, XVe-XVIIIe siècles, Les Belles Lettres, Paris, 2001.

Michel Morineau, « Flottes de commerce et trafics français en Méditerranée au XVIIe siècle (jusqu'en 1669) », *XVIIe siècle*, n° 86-87, 1970, p. 135-172.

François Moureau, La Plume et le plomb, Espaces de l'imprimé et du manuscrit au siècle des Lumières, Paris, Presses de l'Université Paris-Sorbonne, 2006.

Ioli Vingopoulou, *Le Monde grec vu par les voyageurs du XVIe siècle*, Athènes, Institut de recherches néohelléniques, Fondation nationale de la recherche scientifique, « Collection Histoire des Idées », 2004.

（ふじい　ようこ / 実践女子大学非常勤講師）